

3. 高森町の動物



ニホンカモシカ

3.1

哺乳類



ニホンザル

(文・図・写真：宮下 稔)

恐竜が栄えていた頃の哺乳類は、体が小さくか弱かったので、闇に紛れて行動していたようです。その習性は哺乳類全盛の今でも踏襲しており、基本的には夜行性です。ただ、サルやリスは樹上に逃げる能力をもっているため、昼間もよく活動しており、目撃の機会が多い哺乳類です。

原始的な哺乳類では卵生のもものもありますが、多くは胎生で恐竜より育児環境は安全です。また、卵生のもものも含めて乳で子育てをします(これが「哺乳類」の名前の由来です)。全身に毛があり、体温を一定に保つ能力を備え、氷河期でも生き延びることができました。

肉食と草食という分け方がされますが、肉食の哺乳類もかなり植物を食べています。特に日本の中・大型肉食哺乳類は十分な食肉を確保できないため、果実や木の実といった代用食品で命をつないでいます。しかし、コウモリやモグラなどは生きた獲物が豊富ですので、完全な肉食です。



高森町の哺乳類概要

サルやリス以外の哺乳類は主に夜行性です。また、昼間活動していても人間が近づくと先に察知して身を隠すので、生息の確認は困難です。そこで、今回は次のような方法で調査をすすめてきました。

- ・生活の痕跡(足跡や食べ痕、ふん) 探索(次のページ「コラム」参照)
- ・センサーカメラによる撮影
- ・罠による捕獲(小型哺乳類)
- ・巣箱設置(モモンガやヤマネ)

その結果、次の哺乳類が確認できました。確認状況の詳細は目録に記載しました。

今回の調査での確認種

科	種
トガリネズミ科	カワネズミ・ジネズミ
モグラ科	ヒミズ・ミズラモグラ・コウベモグラ
ヒナコウモリ科	アブラコウモリ・ヤマコウモリ
オナガザル科	ニホンザル
ウサギ科	ノウサギ
リス科	ニホンリス・ムササビ
ヤマネ科	ヤマネ
キヌゲネズミ科	ハタネズミ
ネズミ科	アカネズミ・ヒメネズミ・カヤネズミ・ハツカネズミ・クマネズミ・ドブネズミ
クマ科	ツキノワグマ
イヌ科	タヌキ・キツネ
イタチ科	テン・イタチ・アナグマ
ジャコウネコ科	ハクビシン
イノシシ科	イノシシ
シカ科	ニホンジカ
ウシ科	ニホンカモシカ

生息が予想され、今回確認できなかった種

科	種
トガリネズミ科	トガリネズミ
モグラ科	ヒメヒミズ・アズマモグラ
リス科	モモンガ
キヌゲネズミ科	ヤチネズミ・スミスネズミ
イタチ科	オコジョ

天竜川河川敷のあまり人手が入らない草原にはキツネやタヌキ、イタチなどが生息しています。

それに隣接する氾濫原はかつて水田が広がっていましたが、近年宅地化が進み哺乳類には住みにくくなっているようです。そういう中でも人手の入らない草むらにカヤネズミの営巣が確認できました。

氾濫原に隣接する段丘崖には林が広がっており、

3. 高森町の動物

哺乳類相はけっこう豊かです。キツネ・タヌキのほかニホンザル、ノウサギ、テン、ハクビシンなども生息しています。さらにニホンジカやカモシカまで確認できました。

集落や農耕地は、野生哺乳類には住みにくい環境だと思われませんが、キツネ・タヌキ・ハクビシンなどが闇に紛れて活動しているようです。

山麓は最も動物相が豊かで、ツキノワグマやカモシカ、ニホンジカ、イノシシをはじめキツネやタヌキ、ハクビシン、ニホンザル、リスなどが確認できました。さらに、希少種のみずらモグラやヤマネまで確認できました。山地の調査はなかなか手が入られませんが、アカネズミやヒメネズミ、イタチ、ツキノワグマ、イノシシを確認しました。

コラム 哺乳類の生息を確認する方法

哺乳類はそばにいてもなかなか気づきませんが、生活跡(足跡・食痕・ふんなど)を探せば生息が確認できます。足跡の観察は雪が積もった時がチャンス。また、泥や砂の上でも見られることがあります。

足跡



ノウサギ (山の寺)



テン (山の寺)



イタチ (万年橋下)



イノシシ (山の寺)



リス (湯ヶ洞)



ハクビシン



ニホンザル (不動滝付近)



シカ (本学神社)

食跡



クマ棚 (クマが木の実を食べた跡)
(高森カントリークラブ付近)



リスがクルミを割った跡
(きれいにまっぷたつ)



ネズミのかじり跡



サルのかじり跡 (湯ヶ洞)

ふん



カモシカふん (山の寺付近)



イノシシふん (山の寺付近)



キツネふん (高森ドーム)



サルふん (不動滝付近)



日本一小さな哺乳類トガリネズミとそのなかま

トガリネズミのなかまは、尾の形がネズミに似ているので「〇〇ネズミ」と名づけられています。モグラと同じ食虫類です。これらは鼻先（口吻）がとがっており、目がケシ粒のように小さく、生きた動物を捕えて食べるという共通点があります。

トガリネズミ

トガリネズミは哺乳類の中では最も小型で成体でも4～7g程度です。ジネズミによく似ていますが歯の先端が赤いので容易に区別できます。亜高山の森林からハイマツ帯のミズゴケの厚い林床にすみ、地表浅くに坑道を掘ってミミズ・クモ・昆虫などを探して捕食しているようです。筆者は今までに以下の5か所で確認しました。

- ①尾高山 標高2,000m付近、雌、体重6g
- ②飯田市の松川入道 1979（昭和54）年12月、標高1,000m付近で捕獲、体重6g
- ③大鹿村青田山 1985（昭和60）年6月拾得、標高1,600m付近
- ④大平峠下 1986（昭和61）年10月、標高1,200m付近で捕獲、体重4g
- ⑤豊口山 1993（平成5）年8月2日、標高2,200m付近

今回の調査では、山間部に手が入れられなかったため、確認することはできませんでした。



トガリネズミの頭骨

ジネズミ

今回の調査でトガリネズミは確認できませんでしたが、牛牧の山本清氏からそれらしい標本が提供されました。たしかに外見はトガリネズミのように見えたが、頭骨標本を作製し精査したところ、ジネズミの特徴が確認できました。

ジネズミは、トガリネズミよりひとまわり大きく体重が6～8g位です。人里から山林にかけて普通に生息しており人家に入ってくることもあります。筆者は高森中学校に勤務していた1975（昭和50）年頃に、下市田の住宅で目撃したことがあります。

今回の調査で確認できたのは、天竜川の河川敷と牛牧上の山麓部だけですが、高森町にも広く分布しているものと思われます。



ジネズミ

カワネズミ

トガリネズミのなかまでもう一種、カワネズミが高森町にも生息しています。体重はトガリネズミの10倍ほどありますが、外見はよく似ています。清流に生息するということになっていますが、小椋吉範氏の「天竜川付近の養魚場で捕獲」という例もあります。今回の調査では、大原均氏により弓矢沢で目撃されましたが、高森町にも複数の溪流がありますので、かなり生息していると思われます。



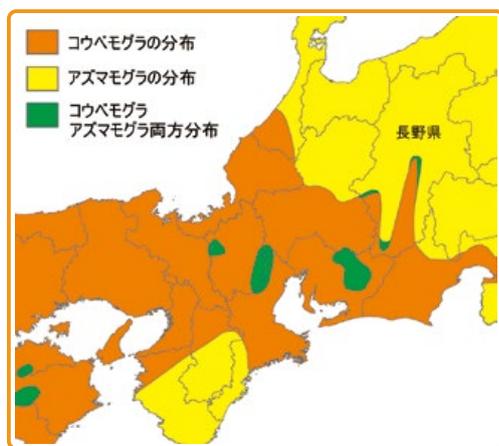
カワネズミ（撮影：大原均）



コウベモグラが、アズマモグラを駆逐しながら進出中

人家付近に普通に生息し、畑や水田にトンネルを掘るので害獣とされているモグラはコウベモグラです。そのコウベモグラが入りにくい場所にはアズマモグラが生息しています。両者はよく似ていますが、アズマモグラの体重が80g程度に対して、140gに達するコウベモグラを筆者は確認しています。

アズマモグラは、かつて本州およびそれ以南に広く分布していましたが、リス-ウルム間氷期に日本は大陸と切り離され、その間に大陸ではアズマモグラの祖先が進化し大型のコウベモグラになりました。そして前回の氷河期で大陸と陸続きになったとき、西の方から侵入してきました（阿部, 1974）。その結果アズマモグラは次々と駆逐され、コウベモグラの生息域が広がってきました。そして、その進出は現在も進行中なのです。



コウベモグラの進出

The Wild Mammals of Japan, Second edition(2015) を基に作成

その前線が、長野県では木曾の上松と塩尻の北小野あたりに、また、一部は最近になって諏訪に達したそうです。木曾谷では50年間に約3km北上した（阿部, 2010）ことが明らかとなっています。塩尻あたりでは、アズマモグラとコウベモグラの競合関係はバランスを保っていましたが、とうとう1993（平成5）年に諏訪盆地湖南の水田に侵入していることが確認されました（Abe, 2001）。

下伊那はすでにコウベモグラの天下ということになっていましたが、筆者は下伊那で拾得されたモグラの中でかなり小型の個体に疑問をもち、頭骨を阿部永先生（当時北大教授）に送り同定していただき、アズマモグラの生息を確認しました。写真は松川町で確認されたアズマモグラです。松川町ではテンの糞からもアズマモグラの顎が発見されました。

今回の調査では未確認ですが、山麓部で見られる坑道はアズマモグラのものと思われる。

コウベモグラは天竜川の河川敷から山麓部まで広く生息しています。



アズマモグラの上顎



コウベモグラの上顎



コウベモグラの塚（松岡城跡）



小さなモグラーヒミズとヒメヒミズ

両者はモグラのなかまですが体型は原始的で、前肢がモグラのようにシャベル型になっていないので、トンネル掘りはあまり得意ではありません。特にヒメヒミズはもっとも原始的で、岩の隙間やコケの下などにもぐりこんで生活しているようです。両者は美しい真っ黒な毛皮をまとうており外見はよく似ていますが、尾の形が異なり、ヒミズがバット状で太短いのに対し、ヒメヒミズのは細長いので外見でも区別できます。



ヒミズ



ヒメヒミズ

また、口をあけて切歯を観察してみると、ヒミズのそれは長くて鋭くとがっているのに対し、ヒメヒミズは丸みがあることがわかります。

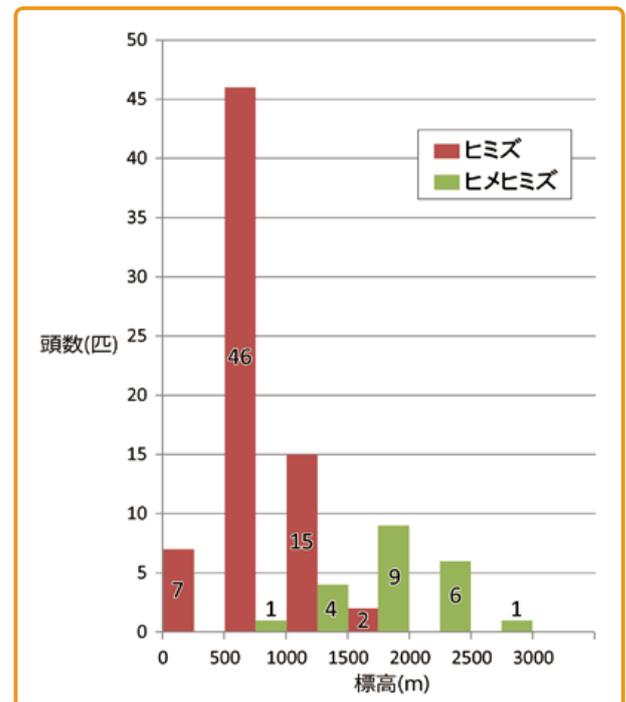


上: ヒメヒミズ
下: ヒミズ

両者の生息域について『遠山郷に生きるどうぶつたち』では「中部地方では、山地帯上部から高山帯にかけてヒメヒミズが、それより低い地域にヒミズが分布しています」とあります。また、「ヒミズは、ある程度土壌の堆積した場所で多く見られます」とのことです。

標高の高い場所でも森林が伐採され林道ができたり植林地になったりするとヒミズが侵入し、ヒメヒミズが駆逐される、ということだと思えます。

上記のような状況は、筆者も下伊那郡下の調査で確認しています。シラビソ峠付近ではヒミズとヒメヒミズの混生がみられました。「もともとヒメヒミズが生活していた場所にヒミズが侵入してきた」と思われます。



ヒミズとヒメヒミズの標高分布図

下伊那誌生物編(2001)第1章哺乳類を基に作成

今回の調査ではヒメヒミズを確認できませんでしたが、近隣の松川町では標高 1,000 m 程度の山林で拾得していますので、高森町にも生息しているものと思われます。



大発見! 牛牧にミズラモグラが生息

ミズラモグラは最も古い型のモグラです。アズマモグラによく似ていますが、下顎の切歯が1対多い点で区別できます。



左：アズマモグラ 右：ミズラモグラ

「後から日本に渡来したアズマモグラに圧迫され、現在は高い山の森林に平家の落人のようにとり残されて細々と生きている」とされています。

長野県内でもごく限られた場所で発見されていますが、下伊那では上村の御池山(右上図の①)で捕獲(北城 私信, 1977)されるまで全く記録がありませんでした。

その後、図の②～⑦の6地点で拾得されたものを筆者が確認しました。

- ② 1981 (昭和 56) 年
摺古木山の中腹 (標高 1,800 m)
- ③ 1982 (昭和 57) 年
光岳にて拾得 (松島高根氏)
- ④ 1986 (昭和 61) 年
恵那山山頂で筆者が拾得
- ⑤ 1988 (昭和 63) 年
塩見岳にて拾得 (小椋吉範氏)
- ⑥ 1989 (平成元) 年
飯田峠にて拾得 (羽場崎清人氏)
- ⑦ 1994 (平成 6) 年
上郷野底 (標高 900m 地点) で筆者が拾得



ミズラモグラの確認地点



ミズラモグラ

今回の調査 2 年目のことですが、牛牧の山本清氏から飼いネコが捕らえたというごく小型のモグラをいただきました。一見したところヒミズのように思われましたが、前肢がシャベル状であることに気づき、精査したところ何とそれはミズラモグラでした(写真)。

山本清氏からいただいたミズラモグラは筆者が知る限り下伊那では8例目、また最も低地での記録(標高 700 m)になります。筆者が今までにミズラモグラを確認した地点は、一番低い場所での記録が野底(図の⑦、標高 900 m)です。

田んぼの土手や畑に縦横にトンネルを穿つ^{うが}コウベモグラは、多くの人に害獣として認識されていますが、ミズラモグラはほとんど人目に触れない場所に生息しているため、希少動物とされています。しかし、案外したたかに生きているのかもしれない。



アカネズミ・ヒメネズミ



アカネズミ (雄)

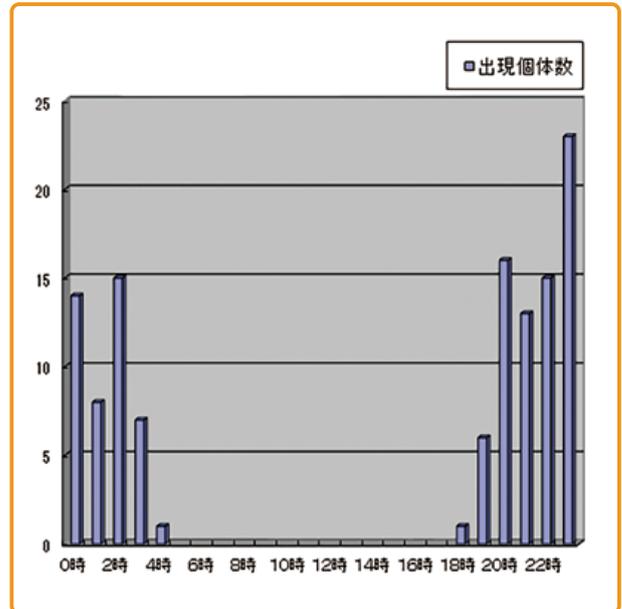


ヒメネズミ

両者とも、頭から背中にかけて赤茶色で腹部が白く美しいネズミです。両者外見がよく似ていますが、アカネズミのほうが大きく(体重が約40g)ヒメネズミはその半分程度です。また、ヒメネズミはやや黒ずんでおり、相対的に尾が長く奥目という点でも区別できます。

アカネズミは草原から明るい林を好み、ヒメネズミはある程度安定した森林に生息しています。南アルプスの亜高山帯ではヒメネズミが優勢で、山麓ではアカネズミが40%、さらに、河川敷では100%という状況が確認されています(宮下、下伊那誌 生物編, 2001)。全体としては、アカネズミが優勢です。

高森町でも、天竜川の河川敷から山麓まで広く分布していることがわかりました。アカネズミは本来のヒメネズミの生息地まで侵入しているようです。



アカネズミの行動時間

上のグラフは上村での調査で得られたアカネズミの行動時間です。日中は全く姿が記録されていません。

今回の調査でも、アカネズミは夜間に記録されています。アカネズミたちは暗闇に守られて繁殖しているようです。



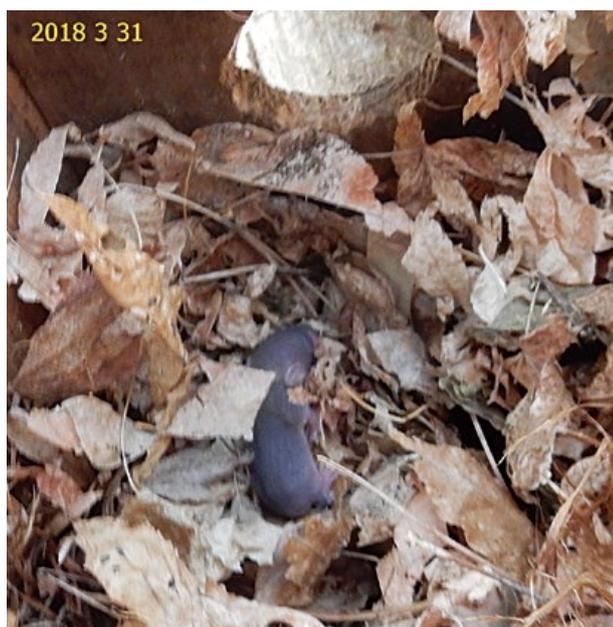
アカネズミとヒメネズミの確認地点

子どもを命がけで守るヒメネズミ

今回の調査で、ヤマネ調査用に写真のような巣箱を架設しました。しかし、その利用者はほとんどヒメネズミでした。



ヤマネ調査用巣箱



巣の中の子ども

2018（平成30）年3月31日に巣箱をのぞいたときのことです。成獣が飛び出した後に、まだ目が開いていない幼獣が確認できました。それを写真に収めていたところ、再び成獣が戻ってきたのです。そして次の瞬間、驚くべき光景が展開されました。なんと筆者のすぐ目の前で幼獣をくわえて巣箱から出そうとしたのです。別の場所に、もっと安全な巣が用意されていたのか不明ですが、それ以上ヒメネズミに迷惑をかけてはいけなと思い退散しました。

まだ寒い3月に繁殖していることもわかりました。自然の中でも巣箱のような安全な環境で繁殖活動が営まれているものと思われます。



幼獣をくわえ出す成獣



カヤネズミは希少種か



カヤネズミ

カヤネズミは、ハツカネズミよりさらに小さく(頭胴長約7cm、体重7~8g程度) 背中がオレンジ色で腹は真っ白、つぶらな瞳をもつ愛らしい動物です。また、耳が頭の毛にうずもれており、尾がヒメネズミよりさらに長いというのも特徴です。尾の先端には毛がなく、草の茎に巻きつけたときの滑り止めになっているようです。その名の通り、オギやスキといった、いわゆる「カヤ」の中に葉を丸めてテニスボールほどの巣をつくり、子育てをします。

図は高森町での確認地点です。天竜川沿いの河川敷で複数確認されましたが、カヤネズミが河川敷を好むわけではないと思います。一般にスキやオギは雑草として刈り取られ、カヤネズミが利用できる大きさに育つのは人手が入りにくい場所にしか残っていないのだと考えるからです。



カヤネズミの確認地点

筆者は、今までに飯田市や下條村、豊丘村、松川町生田などで、放置された山の畑や休耕田でカヤネズミの生息を確認してきました。

高森町でも2009(平成21)年11月にゴルフ場上のため池周辺で4個の古巣を発見、さらに本学神社付近でも3個の巣を確認しました。しかし、今回はゴルフ場付近では(カヤの草原は10年前とあまり変化していないように思われますが)確認できませんでした。また、本学神社付近では以前巣が発見された場所のすぐ下の耕作放棄畑で確認しました。

さらに、2019(令和元)年10月に正木地籍の水田(三石孝夫氏所有)で稲への営巣を確認しました。筆者は今までにも稲に営巣した例を飯田市座光寺や松川町(小椋吉範 私信)で確認しています。



正木地籍の水田の巣

農家の方は昔から認識されていたかもしれませんが「ネズミは害獣」というイメージが強く、発見され次第駆除されてしまったのだと思います。また、最近では稲刈りもほとんどコンバインでされるので、全く人の目には触れないで抹殺されているのかもしれない。



おとぎ話でおなじみキツネとタヌキ

哺乳類

キツネやタヌキは、おとぎ話にもよく登場し昔から人とかわりの深い動物ですが、筆者が子どもの頃はめったに人前に姿をあらわすことはありませんでした。しかし、近年人家付近にも出没し、ごくありふれた存在になってきました。

その理由として次の二つの説があります。一つ目は、人間が捨てた^{ざんし}残滓に依存した生活をするようになったことです。人々の生活水準が向上し、残滓が惜し気もなく捨てられるので、苦勞してネズミを追いかけても生活できるようになったということです。少し古い例ですが、筆者は1993（平成5）年、南アルプスの登山道上で輪

ゴムやあめの包み紙が入ったキツネのふんを発見しました。すでにその頃にはキツネの登山活動が始まっていたのでしょうか。そしてもう一つの理由ですが、犬の放し飼いが禁止となったことです。かつて犬の行動圏だった場所が自由に使えるようになったのです。

図のように、高森町でも天竜川の河川敷から山麓部まで広く生息していることがわかりました。



キツネとタヌキの確認地点



河川敷にあらわれたキツネ



タヌキ（やすらぎ荘付近）



キツネ（高森ドーム付近）



意外に身近に生息しているテン

テンはイタチのなかまで、イタチによく似ていますがはるかに大きく、体重が900～1,500gほどです（イタチは雄でも400～600g）。

筆者がテンに初めて出会ったのは、1985（昭和60）年のことです。場所は飯田松川の松川入、入道付近です。ちょうど冬でしたので、目の覚めるような黄色い姿でした。その後、1996（平成8）～1998（平成10）年に清内路中学校に勤務していたとき、通勤途中に何回か目撃しました。また、車にはねられたものを拾得したこともあります。かつて筆者は「テンは山の動物であり、めったにみられない希少種だ」と思いこんでいました。しかし、『上村史』執筆のために村内にセンサーカメラを設置したところ、奥地はもちろん人家付近にも生息していることがわかりました（上村史，2008）。



冬毛のテン（本学神社付近）

2004（平成16）年には、山の寺上の戒壇不動に設置したセンサーカメラでも確認しました。さらに、2006（平成18）年には天竜峡付近でテンが確認され、決して「山の動物」ではないことがわかりました。天竜峡では幼獣も撮影されたので、繁殖していることも確認できました。

今回の調査でも図のように複数の場所で確認できました。

一方、イタチは2019（令和元）年に松川町の元大島で目撃したり、高森町でも天竜川河川敷で足跡が多数見られたりしたのでテンより生息数は多いと思っていましたが、確認数はわずかでした。



テンとイタチの確認地点

ちなみに、上村の調査では2年間に20か所でテンを記録しましたが、イタチは1例のみでした。意外に生息数が少ないのかもしれませんが。

しかし、昔からテンが広く分布していたかどうかについては疑問も残ります。近年、タヌキやキツネが目につくようになったと同様の現象なのかもしれませんが。テンは、タヌキやキツネのように目立たないので、一般には気づかれないだけかもしれません。



夏毛のテン（小滝橋付近）



身近になった国の天然記念物ニホンカモシカ

ニホンカモシカは、名前や足跡などはシカに似ていますが、ウシ科の動物です。古い型の動物で、地球の歴史やウシ型動物の進化のカギをにぎる重要な存在です。良質な毛皮や肉を求めて乱獲され絶滅寸前まで追いやられたので、1955（昭和30）年に特別天然記念物に指定されました。

しかし、近年になって植林した幼木を食い荒らすという被害が広がってきて、関係者から捕獲申請が出されるようになり、とうとう1980（昭和55）年に麻醉銃による捕獲が決行されました。これをきっかけに、捕獲作戦は次々とエスカレートし、現在ではライフル銃による射殺が普通になってしまいました。

筆者が飯田松川入の調査に参加した頃（1970年代）には、国による厳しい保護策の効果で個体数が増加していたようです。飯田松川入では容易にカモシカを目撃することができました。捕獲ができるようになったことで、また絶滅危惧種に追いやられるかもしれないと心配しましたが、現在では人里付近にも生息が確認されるようになりました。



ニホンカモシカ（松川町・片桐ダム付近）

ニホンジカのように群れで広範囲を食い荒らすことなく静かに生活していますのであまり気づかれないようです。

近年人里で目撃され話題にはなっていますが、高森町でも山麓部はもちろん高森北小学校付近でも生息が確認できました。

以下の写真2枚はどちらも明るい時間帯に記録されていますが、気づかれないようです。



ニホンカモシカ（やすらぎ荘付近）



ニホンカモシカ（町民研修センター付近）



希少種ヤマネの確認！



ヤマネ

ヤマネは頭はネズミ、尾はリスに似ており、背中に黒い筋があるかわいらしい動物です。成体でも夏は14～20gくらいしかありませんが、秋には冬眠にそなえて栄養を蓄え34～40g程度になります。

外気温が8℃以下になると冬眠に入り、恒温動物なのに体温が0℃近くまで下がるようです。冬眠は凍結しない場所を選び、皮下脂肪を最小限消費しながら春を待つのです。山小屋などで冬眠していた所を発見され、冬眠を邪魔され春を待たずに死亡したというニュースを目にしたことがあります。

主に広葉樹林に生活していますが、亜高山の針葉樹林にも分布しているようです。食物は木の実、種子などのほか昆虫や小鳥の卵もよく食べるそうです。昼はキツツキのあけた穴や樹洞で眠っており、活動は夜間です。1975（昭和50）年に国の天然記念物に指定された希少種です。

筆者が今まで得た情報でノートに残っているものは次の3例のみです。

- ①1975（昭和50）年1月、平谷村にて。割った薪の中から出て来て保護される。（小椋吉範氏より）
- ②1988（昭和63）年、大鹿村釜沢にて。送電線のクランプカバーの中に営巣。6匹子どもが発見された。（飯田市の生徒より）
- ③2000（平成12）年12月、清内路峠で発見される。（中部電力社員より）

今回の調査ではヤマネ用の巣箱（写真）を架設してみました。堂所付近や山の寺、ゴルフ場などで延べ30個ほど架設しましたが、ほとんどヒメネズミに占領されました。その中でかろうじて堂所付近に架設した巣箱に一頭入ってくれました。



ヤマネ用巣箱



巣箱に入ったヤマネ

写真は堂所付近に設置したヤマネ用の巣箱を利用したヤマネです。筆者が直接確認できたのは今回が初めてです。それほど希少種ということになりますが、発見が困難というだけで、山麓部にはけっこう生息しているかもしれません。



リスのなかま

リスのなかまは、ニホンリス・ムササビの2種が確認されました。もう1種のモモンガは確認されませんでした。隣の松川町の山麓では記録されているので、高森町にも生息しているものと思われる。

ニホンリス

姿はネズミによく似ていますが、そのふさふさした尾のおかげで子どもにも大人気の動物です。日中活動しているのでよく目撃されます。危険が迫るとキュルルルという高音を発します。生活場所は主に樹上ですが、センサーカメラはしばしば地上においた姿を記録しています。



地上においたリス（町民研修センター付近）

ムササビとモモンガ

どちらも前肢と後肢の間に皮膜があり、滑空することができます。

ムササビはネコくらいの大きさですが、モモンガはリスより小さく、大きくつぶらな瞳をもつかわいらしい動物です。木の芽や葉・種子・果実・昆虫や小鳥の卵を食べて生活しているようです。モモンガは、1975（昭和50）年に長野県天然記念物に指定されました。松川町では小鳥用の巣箱をモモンガが利用しましたので、今回の調査ではモモンガ専用のものを20か所ほど架設しました。しかし、全く利用されませんでした。

図鑑によると、モモンガの生息地は「亜高山の森林帯」となっていますが、筆者は旧智里西小学校（標高800m）、旧清内路中学校（標高766m）、和合小学校（標高600m）の校舎で確認しました。



モモンガ（松川町）

また、松川町で確認された場所は標高900mでした。

モモンガは樹木の洞穴に巣をつくるため、ある程度樹齢の大きな発達した森林が必要です。しかし、このような森林は次々と伐採され消滅してきています。そのため、標高の低い場所に下りてきて人工物を利用するようになったという説がありますが、もともと低地にも生息していたのかもしれませんが、モモンガは体が小さく夜行性のため、目立たないので気づかれなかったということはいえないでしょうか。逆に、ムササビは人家付近でよく目撃されるので、生息場所は「人里」と考えられていますが、筆者は風超山の山頂付近で確認しており、モモンガと重なっているように思われます。また、旧智里西小や旧清内路中の校舎にはムササビとモモンガが同居していました。

2020（令和2）年1月16日、壬生町長のSNSで、山の寺の山門杉にすみついたムササビが紹介されました。



滑空するムササビ



獣害問題

一般に、多くの哺乳類は「害獣」と思われているようです。害虫を駆除するので人間にとっても有益なモグラやコウモリさえ駆除の対象となっています。今回の調査期間中にもアブラコウモリが住み着いたという苦情が役場に寄せられたのを耳にしました。それはともかく、高森町でも農作物に大きな被害を及ぼすニホンザルをはじめニホンジカ、イノシシなどの問題は深刻です。

町役場産業課林務係によると「イノシシやニホンジカなど大型の動物の被害は上段に集中、それに対してニホンザルやハクビシンは町内全域で発生している」さらに「ニホンザルによる被害は農業だけでなく、住民生活にも及んでいる」「ニホンザルの里慣れが深刻、追い払いなどでも効果があらわれない」とのことです。町でも有害鳥獣侵入防止電気柵が山麓部に設置されています。その効果で「蹄の動物による被害が減少した」ようです。また、「電気柵によって侵入箇所の特定が容易になり、捕獲の対策が取りやすくなった」ということです。しかし、電気柵があっても木の枝を伝って侵入するニホンザルなどにはあまり効果がないようです。

最近まで捕獲が規制されていたニホンジカ

ニホンジカは明治中頃までは全国的に広く分布しており、中央アルプスなどにも生息していたことは確実ですが、銃猟の普及と皮革需要の拡大に伴い全国的に減少してしまいました。そのため、1918（大正7）年に伊那谷の南信濃村・上村・大鹿村は、金華山とともに捕獲禁止地区に指定されたのです。1978（昭和53）年に発刊された『諏訪の自然誌（動物編）』には「シカの生息地と開発地が重なり、狩猟による圧力が加わって・・・種の存続さえ危うくなった状態」とあり、まだ希少種扱いされていました。ところが、その後どんどん増え続け、大鹿村、上村、南信濃村ではシカによる食害で年間5,000万円もの損害を受け、

農林業離れに拍車がかかるなど深刻な問題になってきました。1980（昭和55）年頃になると天竜川右岸地域でも見かけるようになり、1989（平成元）年には「泰阜村から阿南町へ天竜川を泳いで渡り分布を広げている（信州日報）」という報道が目にとまりました。しかし、禁猟措置が解かれたのは、雄ジカが1994（平成6）年、そして雌ジカについては2001（平成13）年のことです。



ニホンジカ(本学神社付近)

伊那山地で普通にニホンジカが見られるようになった頃でも、まだ天竜川右岸地域では「絶滅」とされていました。ところが、1981（昭和56）年には「高森町牛牧で幼獣を保護、飯田動物園で保護飼育」というニュースを目にしたことが思い出されます。今思えば、既にひそかに入ってきていたのでしょう。



ニホンジカとイノシシの確認地点

3. 高森町の動物

ニホンジカは高森町ではまだ山麓部で静かに暮らしているようです。

また、ニホンジカが法律で守られていた頃でも有害駆除ということでどんどん捕獲されてきたイノシシも健在です。しかし、ニホンジカ同様「山麓部に留まって」いるようです。



イノシシ (本学神社付近)

最近まで長野県の天然記念物だった ハクビシン

ハクビシンは、日本で唯一のジャコウネコ科の動物です。1950年代までは幻の動物とされ、長野県の天然記念物に指定されていました。伊那谷のものは静岡方面より北上してきたようですが、終戦前後に飯田市で捕獲された記録があり、1955（昭和30）年、1960（昭和35）年とポツポツ天竜川沿岸で捕獲されるようになりました。

筆者が初めて野生のハクビシンに出会ったのは阿南町で、1976（昭和51）年6月22日のことです。その後急速に分布を拡大していく様子が、新聞報道でもうかがうことができました。分



夜間活動するハクビシン

布拡大とともに被害が続出し、とうとう1982（昭和57）年になって松川町や清内路村などに頭数を限って捕獲の許可が出されました。1990年代には飯田市の街中にある人家の屋根に住み着いたという情報も伝わってきました。その頃になってはまだ県の天然記念物で、教育委員会の管轄でしたので、事務局のスタッフが対策に頭を痛めていました。長野県教育委員会が「天然記念物指定解除の検討」という方針を明らかにしたのは、当時の環境庁が「ハクビシンを狩猟鳥獣に追加」した1994（平成6）年6月以降のことです。その頃にはすでに長野県も全域に分布拡大し尽くしていたのです。

高森町でも図のように天竜川付近から山麓部まで広範囲に生息していることが確認されました。



明るくても活動するハクビシン (やすらぎ荘付近)



ハクビシンの確認地点

ニホンザル

ニホンザルは霊長類としては最も北（中でも青森県下北半島が北限）に分布していることで学術的にも貴重な哺乳類です。しかし、近年人里に現れて農作物を荒らすようになり高森町でもその対策に追われています。



ニホンザル（高森ドーム付近）



立派な雄のニホンザル（松川町・上大島リンゴ畑付近）

ニホンザルの主食は、もともと果実や種子、若芽、若葉、昆虫、サワガニなどです。このような餌が豊富な場所は、落葉広葉樹林や河川などの林縁です。しかし近年、そのような場所はスギ・ヒノキなどの単相林に変わってしまったり、ダム建設の影響を受けたりするなどして激減してしまいました。自然環境をもとに戻すことは不可能に近いと思いますが、ニホンザルがこれ以上里に執着しないようにしたいものです。

かつて、山間部に大きな穴を掘り、廃果が処理されていた例があります。そのため、冬場も安定した餌が確保され、サルの増殖につながっていたことがわかり、現在は埋め立てられています。しかし、まだ畑などに放置された廃果が高森町でもみられます。

ニホンザルたちは、まだ里で十分生活できるようです。



放置されたリンゴの廃果

日中も行動しているツキノワグマ 行動が変化してきたか？

クマが人里に出没するようになったのは、そう古いことではありません。

飯田市で初めて里にクマがおりてきたのは1954（昭和29）年10月22日のことです。「野底川にそって山を下り、人の寝静まった夜半に街灯の明るい桜町を堂々と闊歩（中略）浜井場小の校庭を通過、野底川にかけおりた所を警察官のピストルで仕留められた」（伊藤文男-「風越山の生物」南信州新聞より引用）とあります。

伊那谷では、果樹栽培が盛んに行われていますがリンゴやナシはツキノワグマも大好物で、味をしめたものは毎年秋になると出て来て被害を与えるようになったと思われます。

高森町でも正木の梨園に出没したという通報で自動カメラを設置し、その姿を撮影したことがあります。2006（平成18）年のことです。そのときは闇に紛れて恐る恐るという姿でしたが、今回の調査で自動カメラが白昼堂々と動き回るツキノワグマを複数とらえました。



日中にも活動するツキノワグマ(町民研修センター付近)



日中にも活動するツキノワグマ(堂所)

かつて筆者は「ツキノワグマの行動時間帯は主に夕暮れから夜間そして早朝」と思い込んでいました。それで、山に出かけてもツキノワグマとの遭遇などあまり心配しませんでした。

また、ツキノワグマの主食は動物でもアリのような小さなもの、あとは果物や木の実で、大きな動物を捕食することはない、と考えていました。ところが2008年刊行の『上村史』の調査のとき、ツキノワグマがカモシカを襲う現場に遭遇したのです。その時は見誤りだと思っていましたが、その後木曾でニホンジカを襲ったというニュースを目にしました。

高森町のツキノワグマたちは山麓部に留まっているようで、人的被害は確認していませんが、行動がかつてと違ってきたように思われますので注意したいものです。

かつては害獣の代表だったノウサギは今

ノウサギは、かつて森林の害獣としてさかんに駆除されてきました。その一環としてキツネが導入されたこともあります。その効果かどうかわかりませんが、最近「ノウサギが少なくなった」というような声をよく耳にします。筆者も、近年少なくなったような気がしていました。

しかし、今回の調査で複数確認できました。



ノウサギ



ノウサギの確認地点

コラム ロードキル

道路上にて動物が車に轢かれることを「ロードキル」と呼びます。

高森町でも多くの動物が車に轢かれており、車両の通行障害、衛生面の問題から毎年多くの通報が町に入り対処しています。轢かれている動物は哺乳類が多く、その他、鳥やへびなど多くの生き物が事故にあっています。これまでの通報記録から事故にあった種類について確認すると、タヌキ、ハクビシン、キツネの3種が特に多い状況でした。

(高森町環境水道課環境係)



ヒミズ (山吹)



ノウサギ (吉田)



タヌキ (下市田)



キツネ (下市田)



テン (山吹)



イタチ (下市田)



ハクビシン (山吹)



トビ (大島山)

3. 高森町の動物

●目録

哺乳類

科名	生息が予想される種		確認地名(標高)	希少種・外来種
	和名	学名		
トガリネズミ	トガリネズミ属	<i>Sorex</i> sp.		RL (環 NT/ 県 VU)
	カワネズミ	<i>Chimarrogale platycephalus</i>	弓矢沢	RL (環-/ 県 NT)
	ジネズミ	<i>Crocidura dsinezumi</i>	湯ヶ洞北(680)、追分(540)	
モグラ	ヒメヒミズ	<i>Dymecodon pilirostris</i>		
	ヒミズ	<i>Urotrichus talpoides</i>	山の寺キャンプ場(880)、湯ヶ洞北(680)、吉田城山(550)、本高森山登山口	
	ミズラモグラ	<i>Euroscaptor mizura</i>	湯ヶ洞北(680)	RL (環 NT/ 県 VU)
	アズマモグラ	<i>Mogera imaizumii</i>		
	コウベモグラ	<i>Mogera wogura</i>	吉田城山(550)、親水公園付近(420)、寺沢川(570)	
ヒナコウモリ	アブラコウモリ	<i>Pipistrellus abramus</i>	山吹アビタ付近(440)、高森北小学校(510)	
	ヤマコウモリ	<i>Nyctalus aviator</i>	町民研修センター付近(840)	RL (環 VU/ 県 VU)
オナガザル	ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i>	不動滝線(900)、堂所(750)、湯ヶ洞(750)、高森公園上(800)、町民研修センター(820)、小田沢大橋(720)、高森ドーム	
ウサギ	ノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i>	高森公園上(800)、ヨキトギ沢(850)、小滝橋(850)、山吹公園(530)、湯ヶ洞北(680)、町民研修センター(820)	
リス	ニホンリス	<i>Sciurus lis</i>	高森公園下(800)、堂所(750)、湯ヶ洞北(680)、山の寺キャンプ場(750)、町民研修センター(820)、高森ドーム	
	モモンガ	<i>Pteromys momonga</i>		RL (環-/ 県 NT)
	ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i>	山の寺(880)	
ヤマネ	ヤマネ	<i>Glirulus japonicus</i>	ヨキトギ沢(780)	RL (環-/ 県 NT)
キヌゲネズミ	ヤチネズミ	<i>Eothenomys andersoni</i>		
	スミスネズミ	<i>Eothenomys smithii</i>		
	ハタネズミ	<i>Microtus montebelli</i>	吉田千早原(720) 湯ヶ洞北(680)	
ネズミ	アカネズミ	<i>Apodemus speciosus</i>	林道吉原線(1000)、ヨキトギ沢(850)、町民研修センター(820)、湯ヶ洞北(680)、城山公園(500)、山吹公園(530)、吉田城山(550)、親水公園付近(420)	
	ヒメネズミ	<i>Apodemus argentus</i>	林道吉原線(1000)、山の寺キャンプ場(880)、ヨキトギ沢(850)、高森公園上(850)、湯ヶ洞北(680)	
	カヤネズミ	<i>Micromys minutus</i>	本学神社付近(680)、高森荘付近(440)、田沢川橋付近(430)、親水公園付近(420)	RL (環-/ 県 VU)
	ハツカネズミ	<i>Mus musculus</i>	追分(590)	生態系被害防止外来種
	クマネズミ	<i>Rattus rattus</i>	追分(590)	生態系被害防止外来種
	ドブネズミ	<i>Rattus norvegicus</i>	湯ヶ洞(750)	生態系被害防止外来種
クマ	ツキノワグマ	<i>Ursus thibetanus</i>	林道吉原線(1000)、高森公園上(800)、林道小沼大沢線(990)、町民研修センター(820)	
イヌ	タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>	湯ヶ洞(750)、山吹公園(530)、やすらぎ荘付近(520)、高森公園上(800)、町民研修センター(820)、天竜川河川敷	
	キツネ	<i>Vulpes vulpes</i>	小滝橋(850)、町民研修センター(820)、やすらぎ荘付近(520)、堂所橋(750)、湯ヶ洞(750)、高森公園上(800)、高森ドーム	
イタチ	テン	<i>Martes melampus</i>	堂所橋(750)、山吹公園(530)、松岡城(550)、小滝橋(850)	
	イタチ	<i>Mustela itatsi</i>	小滝橋(850)、天竜川河川敷	
	オコジョ	<i>Mustela erminea</i>		RL (環 NT/ 県 NT)
	アナグマ	<i>Meles anakuma</i>	本学神社付近(680)	
ジャコウネコ	ハクビシン	<i>Paguma larvata</i>	山の寺キャンプ場(880)、小滝橋(850)、山吹公園(530)、湯ヶ洞(750)、町民研修センター(820)、やすらぎ荘付近(520)、本学神社付近(680)	生態系被害防止外来種
イノシシ	イノシシ	<i>Sus scrofa</i>	林道吉原線(1,000)、高森カントリー(800)、小滝橋(850)、ヨキトギ沢(850)、町民研修センター(820)、湯ヶ洞(750)	
シカ	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>	高森カントリー(800)、山の寺キャンプ場(880)、林道吉原線(1,000)、高森公園上(800)、町民研修センター(820)、本学神社付近(680)	
ウシ	ニホンカモシカ	<i>Capricornis crispus</i>	高森カントリー(990)、山の寺キャンプ場(880)、やすらぎ荘付近(520)	

*希少種は、レッドリストのカテゴリーを RL (環境省/長野県) で記載した。(CR: 絶滅危惧ⅠA 類、EN: 絶滅危惧ⅠB 類、VU: 絶滅危惧Ⅱ類、NT: 準絶滅危惧、N: 留意種、DD: 情報不足)
 **外来種は、外来生物法によって特定外来生物に指定されているものは特定外来生物と記載し、特定外来生物以外の生態系被害防止外来種リスト記載種は、生態系被害防止外来種と記載した。

●参考・引用文献

阿部永(1974) 二種のモグラの分布境界線における 14 年間の変化. 哺乳動物学雑誌 6 (1) : 13-23.
 阿部永(2000) 日本産哺乳類の頭骨図説. 北海道大学図書刊行会.
 Abe, H. (2001) Soil hardness, a factor affecting the range expansion of *Mogera wogura* in Japan. Mammal Study 26 : 45-52.
 阿部永(2010) 2009 年本州中部におけるコウベモグラ *Mogera wogura* の分布北東端, 特に長野県における北端 50 年間の変化. 哺乳類科学 50 (1) : 55-66.
 今泉吉典(1981) 原色日本哺乳類図鑑. 保育社.
 Ohdachi, S.D., Ishibashi, Y., Iwasa, M.A., Fukui, D. and Saitoh, T. (2015) The Wild Mammals of Japan, Second edition. Shoukadoh Book Sellers and the Mammal Society of Japan.
 上村史編纂委員会(2008) 上村史自然編. 上村史刊行委員会.
 信濃毎日新聞社(編)(1969) しの動物植物記, pp. 20-21, 34-35. 信濃毎日新聞社.
 長野県(2004) 長野県レッドデータブック 動物編. 長野県.
 野間佐和子(2003) 自然紀行 日本の天然記念物. 講談社.
 南信濃村教育委員会(1998) 遠山郷に生きるどうぶつたち. 南信濃村.
 宮下稔・桐生尊義(2001) 第 1 章哺乳類. 「下伊那誌 生物編」, pp. 243-285. 下伊那誌編纂委員会.
 両角徹郎・両角源美(1978) 第 1 節哺乳類. 「諏訪の自然誌 動物編」, pp. 29-168. 諏訪教育会.
 両角徹郎・両角源美・宮下稔ら(1983) 中央アルプス飯田松川流域の哺乳動物相. 「天竜川水系中流部流域の自然と社会 総合学術調査報告書」, pp. 291-351. 中部環境緑化センター.